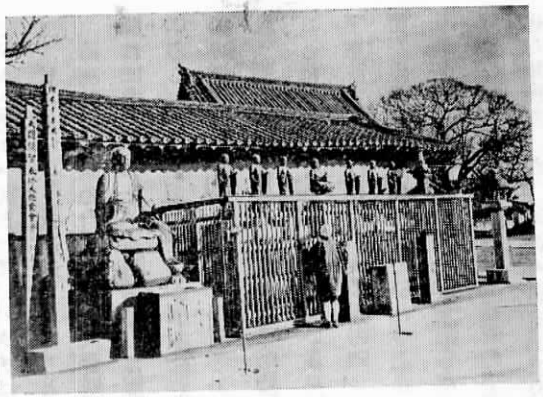
# 千日前巷談

## 其の一　獄門跡へ客寄せ

「おとうちゃんかって、バクチばっかりしてるやんけえ」――。学校帰りに、ベッタン遊びに熱中しているむすこ・徳次郎をしかりとばした奥田辨次郎は、こうやり返されてギクッとした。

辨次郎は高津の自宅でもと八百屋をしていたが、トバク仲間に誘われて香具師（やし、テキ屋）の群れに投じていた。前回紹介した侠客・小林佐兵衛の配下だったこともある。その佐兵衛は明治七年のこのころ、すでにヤクザ渡世から足を洗い堂島米相場で堂々たる億万長者にのしあがる一方、消防の名頭取とうたわれている。「わいももう三十七。なんぞパーッとやってこまさな」――そう思っていたやさきに〝負うた子に教えられた〟。辨次郎はもの思いにふけりながら、歩いた。プーンとにおってくるまっ香くさい異臭――いつのまにか千日の墓地へきていた。千日前は江戸時代、下難波村と呼ばれた。大阪夏の陣（一六一五）で市中が焦土になったあと、初代の大阪城代になった松平忠明が市街地整理のひとつとして、市中四か所の墓地をここに移し、刑場も兼ねた。千日前という地名は、ここの火葬場を支配した天台宗の御坊・千日山安楽寺からきているという説と、寛永十四年（一六三七）にできた法善寺の千日念仏からきたという説がある。いずれにしても、大阪随一の陰惨な場所だった。その今昔をあまり詳細につき合わせると、斬首台が食堂のまん中、といったよう

千日前の開発者奥田辨次郎



千日山安楽寺西の坊のヘイに沿って立っていた六地蔵尊。いまの「ときわガンコーナー」「千日会館」あたり

## 千日前の今昔

| 明治7年 | 明治40年 | 現在 |
|---|---|---|
| 黒門 | 軽業・奥田席前 | 千日前電停 |
| 刑場・獄門台 | アシベ倶楽部 | アシベビル |
| 安楽寺六坊 | 金沢の小屋 | ときわビル |
| | | 千日会館 |
| 祭場 | 帝国クラブ<br>浪曲・愛進館 | 大劇 |
| 茶店・西墓地 | 第一～第三<br>電気館 | 千日デパート |
| 無常の橋 | 南一つ目辻 | 〃 |
| 焼き場 | 南海通辻 | 〃 |
| 灰山 | キネマ倶楽部<br>など | 吉本ボーリング<br>センター辺 |

地価（三・三平方㍍当たり）
五十銭～一円　二百～五百円　二百～五百万円

なことになり兼ねないが営業妨害にならぬ程度を表にしたので、ご覧頂いたい。

しかし、このひと気のないところにも、明治の大変革は無縁ではなかった。明治三年四月に刑場は廃止された。明治六年には「仏教のかわりに、神道を盛んにしよう」という仏教軽視のあおりで「火葬は仏教のもたらした悪習だからまかりならん。土葬にせよ」の太政官布告。それも一年たたぬまに「衛生的だからやはり火葬にせよ」の朝令暮改。そんななかで、千日の焼き場と墓地も、市街地はずれの天王寺村（いまの阿倍野斎場）に移し、その跡





を歓楽地帯にしようという声は出ていたが……。獄門場や首洗いの井戸、骨を捨てる灰山などはまだそのまま。二百五十年来の薄気味悪さは一朝一夕にとれない。

歓楽街説も声だけだった。辨次郎は、軽い疲れをおぼえて黒門をくぐった。一尺（三〇・三㌢）角の黒塗りの柱を地上から二間（三・六㍍）出し、四間（七・二㍍）間隔で建ててある。これで〃四二（しに）。メートル法では、こうはいかない。門をはいってすぐ西側に一軒の茶店があった。会葬者のゲタあずかりと、葬式人足の休息に利用されたものだ。弁次郎がしょうぎに腰をおろすのを待ちかねたように、茶店の老婆のぼやきがはじまった。

「あんさん、ご一新やなんていうけど、殺生だっせ。火葬があかん、ヨソへ移す、いわはってから、とんと火の消えたようで……。そうれん（葬式）もないのに、ここまで休みにきてくれはる人もないし……」

そりゃそうだろう。刑場がなくなったとはいうものの、茶店のまん前にはさらし首をのせる獄門台がデーンと腰をすえたまま。獄門板は長さ三㍍、厚さ五㌢と胸が悪くなるほどのがんじょうさ。その他、処刑用の中央がくぼんだ荒砂地、非人小屋など、およそ目にふれるものは茶や菓子をまずくさせるネタばかり。さすがに弁次郎も苦笑したが、よどみのない老婆のぼやきが、ある個所にきたとき、キラッと目を光らせた。「……せめて、こないだの御坊の開帳みたようなことを、月に一ぺんでもやってくれはったら……」彼はバネ仕掛けのように立ちあがると自宅へとって返し、配下の香具師を動員して御坊開帳のときの情報を集めさせた。

千日山安楽寺には、東、西、南、北、中、隅（すみ）の六坊があった。市民からは御坊ならぬ「隠

坊」（おんぼう）と卑下されていたが、ばく大な火葬料の収入で六坊の院主はぜいたく三味。ところが火葬禁止で収入がなくなったうえ「朝令暮改」のときに住友家出資の「八弘社」に火葬の権利を奪われ、生計の道を失った。その巻きぞえで営業不振におちいった千日の葬具屋・山田屋重助が、千日前への人寄せ策を考えた。

歌舞伎で有名な三勝半七の墓が、法善寺境内にあるのをさいわい、その法事をやる。それだけでは心もとないから、崇禅寺馬場の仇討遺品展と名画展をだきあわせる〃三本立て〃六坊のなかに腕の立つニセものづくりの僧がいて三勝半七の遺書、衣類から雪舟、応挙の絵まで、陳列品を全部つくりあげた。これが人気を呼び、とくに好事家を集めたから、かなりの金が落ちた――という報告。

「ほんなら、もっと俗なもんではどや」――辨次郎は、自宅で芸を仕込んでいたサルに赤いジンベを着せ、獄門台前の茶店に実験的に置かせた。庶民の娯楽がすくない時代。「千日にな、着がえをしよるサルがおるねん」「どこや、どこや」というわけで、日ましにたいへんな人だかり。「ようし、おもろいもんなら墓地であろうが人は寄りよる。これでいてこましたれ」――辨次郎はハラをきめた。

明治七年四月十七日、天王寺村に埋葬地ができ、千日前墓地は廃止された。辨次郎の千日前との格闘がはじまる――。見てきたような……ではない。百年後の現在、北区角田町四一、ウメダ地下センター振興会で、こんどは地下街の開発ととり組んでいる弁治郎のひ孫、奥田辨次郎さん(六二)（住吉区粉浜本町二の一六）が、ひい婆さんのフミ（昭和四年、九十三歳で死亡）から、ガッチリ聞いておいてくれた〃一席〃である。





# 千日前巷談

## 其の二　地価、三十年で五百倍

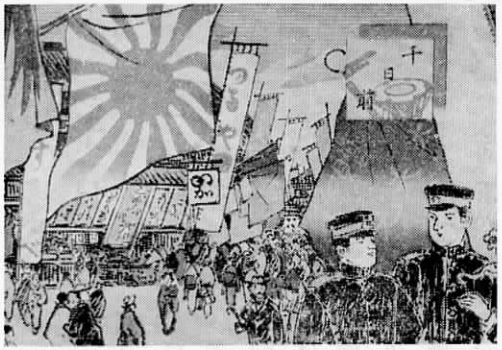
むすこと、三勝半七のいんちき法要と、赤いジンベのサル。これらに教えられて、千日前の開発を思い立った奥田辨次郎は、いさぎよく香具師のサカズキを返した。弁舌さわやかなため、本名の「伊兵衛」がいつの間にか弁次郎になったほどだから、香具師としてはかなり鳴らした男。多少のたくわえもあった。「人を集めるにはまず率先垂範」と明治七年四月、千日墓地の土地払い下げを待って「溝の側筋」（みぞのかわすじ）に、三・三平方㍍（一坪）当たり五十銭で、六十六平方㍍の地所を買った。ここに二階建てを建てたが、これが千日前発展の〃足場〃となる。

いまの千日デパート南側、国際シネマのところ。高津から新川へ落ちる下水が、いまの通りを東西に流れており、そのそばにあるので「溝の側筋」である。このあたりは首切り役人の官舎があった官有地で、売った府が「ご奇特な」とおどろいたほどだ。人骨がうず高く積みあげられた灰山などは、買い手のつく見込みはまったくなく、三・三平方㍍当たり逆に五十銭の賞金をつけて、引き取り手を捜す始末。坂町で質屋をしていた塩田寿賀（すが）というおばあさんは、百六十五平方㍍（五十坪）を引き取ったが、親せきからも〃オニばばあ〃よばわりされ、絶交される騒ぎ。困って府に取り消しを申し込んだが、それも断わられるやっかいな土地柄だった。

辨次郎はそんなことははじめから百も承知。あり金全部をかき集め、香具師時代の縁をたよって興

行師の誘致に走りまわっていたが、妻のフミが〝一豊の妻〟明治版。夫の留守中、ヘソクリをはたいて黒門前の〝一等地〟三百三十平方㍍を入手、ムシロがけの小屋をつくり、弁次郎のつれてきたサル芝居、イヌ芝居で興行を打った。当たることは、すでに茶店のサルで実験ずみ。もうかると三・三平方㍍当たり月五厘の安い借地をひろげた。ふところぐあいがよくなれば、人も集まる。全国を流しているむかしの香具師仲間がころがり込むと、いろいろな見せものを開かせた。

それらの小屋がけは、まずいまの南海通りを東へのび、北向きに立ち並んだ。灰山が近く地代がタダ同然であったのと、客は北からしかこなかったためだ。当時の見せものといってもずいぶんいいかげんなものが多かった。スズメに芸をさせる「スズメチウチウ太夫」や女の力持ちなどはウソいつわりのない方。大ゲサな名前をつけたものを、楽屋裏からのぞいてみると……。「大百足（ムカデ）」というのは、長さ五・五㍍、直径四―五㍍のでっかいもの。ところがあちこちに赤い糸クズのようなものがついているのでよくみると、伊勢エビの胴体のカラを赤い木綿糸でつなぎ合わせたというシロモノ。「生きた大天狗」という大カンバンにつられてはいると、つくりもののテングのそばを、ツノ（角）をくくりつけられたウサギがウロウロ。説明にいわく「天狗は兎角（とにかく）生きている」と人を食っていた。



明治中期の千日前風景（出口神暁氏蔵）

博多の仏師に刻ませた奥田辨次郎（右）
フミ夫妻の木像（奥田辨治郎氏蔵）

そんな見せもの屋は、なにかというと弁次郎の家へかけ込んだ。弁次郎のひ孫・奥田弁治郎さんは「わたしのこども時分もまだそうでしたが、あがりがまちに二畳敷きぐらいの大きなケヤキのおぜんがおました。そのうえにタライのようなめしびつ、茶わん、はし、つけもんが一日中置いておました。腹がへったらモリモリとめしかきこんでまた飛び出して行きよりますねン」

弁次郎のやり方は、来るものはこばまず。ただ同じ業態がダブらぬよう気を配ったから、明治八年になると旧墓地の大きな通りから、日を追って線香くささがうすらいだ。見せもの屋の間を吹矢、だるま落としなどいまの遊技場のようなもの、飲食店などがつなぎ、ドンカチ屋などもおめみえした。これは洋弓で出ベソのようなぶかっこうな的を射ると。天井裏に仕掛けてある天狗やオニがガラガラと大きな音を立てて客のハナ先にブラさがるというにぎやかな遊び。店番はかならず厚化粧の女性でシナをつくって客を呼び込み、茶をすすめた。この茶を飲むことはある種の商談を承知したしるしとされた。いちばんきらわれた灰山にも地価がつきはじめ「八幡の藪知らず」というお化け屋敷の効果を高めたというから、元墓地も変われば変わるもの。

それでも、夜の客足はまだマバラ。辨次郎夫妻は当時平野町に出ていた夜店の誘致にのり出した。

しかし、片や船場の一等場所にみこしをすえているだけに「夜の墓地あとなんか結構だす」そこであみ出したのが、灯油代の全額負担。この魅力は大きかったらしく。夜店もしだいに引っ越し、昼夜兼行の盛り場の基礎はきずかれた。明治年間の千日前の地価相場表からその開発ぶりをのぞいてみよう。明治七年三・三平方㍍当たり五十銭から一円で売買されたのが、十二、三年には二十七―三十五円、十七、八年には三十八―五十円、二十四、五には百五十―二百円、四十年ごろには二百―五百円に騰貴している。

ところで刑場とか囚人が、奇妙に娯楽街とつながるからおもしろい。京都の四条河原町は刑場の隣りだし、横浜の伊勢佐木町は墓地のあと。昭和初期の浅草ファンがなつかしがる瓢箪池は、明治六年に囚人の手で堀られている。東京・小伝馬町の牢獄あとも見せ物が並らんだし、北京やロンドンでも刑場あとが盛り場になっている。

しかし、その辨次郎もむすこの徳次郎が自分のあとをつぐのはきらった。興行界のもつある種のふしだらをきらったらしい。それは百年後のいまも、暴力団とのくされ縁として続いている。

徳次郎は大阪英語学校（のちの三高）を幣原喜重郎らと同期で卒業、取り締まり側の徳島県警部をつとめた。ひ孫の辨治郎さんも二十七年の大阪市吏員生活をさる三十四年終えたが、ひょんなことから地下センターの振興会にはいることになった。「地上と地下の違いはありますが、四代目で同じ大阪の町づくりに協力することになったのはふしぎな縁ですわ」――辨治郎さんはきょうも入居者の世話にいそがしい。

# 笑説・三軒長屋

―名物男飛び出す―

うっかり歩いていると見過ごしてしまいそうな路地の入り口に〝この奥に家り〟と主張するような、カワラぶきの小さな屋根がとりつけてある。それにあきれるほどくすんだ表札がビッシリ。ガタゴトと鳴るドブ板を踏んで行くと、晩ご飯のサカナを焼くにおいの立ちこめる路地に、しょうぎやイスを持ち出して、おとしよりがウチワをバタバタ。ふろあがりのアセモの首スジを、てんか粉でまっ白にした子どもたちがかけまわり「アホ、また汗が出るがな」と、どなりつけられている。

桂文三こと高田留吉は、明治三十九年の芸人番付では大関格に出世していた。

南区西賑町。この界わいは奇跡的に戦災をまぬかれたおかげで、いまなお古きよき大阪庶民の生活をしのばせてくれる〝ろうじ長屋〟の町である。ここが通称「野漠（のばく）」と呼ばれたことは、明治生まれの大阪人なら知っている。その通り、もとは茫漠とした野原であったからだが、明治初年以降、長屋が建てこむようになると、ペコンとナベ底のように低いこの庶民街の代名詞に

なった。北側の内安堂寺町あたりでは、地形そのままにちょっと見さげるような呼び方をした。そんな明治十九年初夏のおはなしである。

「野漠」のいちばん北側、地面がストンと低くなって、ガケのように切り立っているまぎわに、ジメジメした湿気くさい三軒長屋があった。住人を東から紹介すると、昼はたたき大工、夜は辻待ち車夫の高田留吉。毎日損料を払って人力車を借り、大阪の町を流しているが、三度のめしより落語が好き。どうかすると寄席へはまり込んで商売に身が入らず「車さえ引いてくれたら」と女房にぼやかれている。三十前なのに、すこし目が悪い。

和助や留吉が飛び出してきそうな西脈町の〝ろうじ長屋〟

まん中は、三十そこそこで独身の辻八卦・宮崎八十八（やそはち）先生。昼は天満天神の境内、夜は三の日なら老松町、一、六なら御霊はん、八の日なら稲荷山と、縁日の夜店を選んで見台を出している。「運気縁談・走り人・失せもの判断」と声ひくく呼びかけ、日月・算木の絵を書いた行燈もわ





ざと暗くして、客が近寄りやすいようにしているが、どうも繁盛しない。毎日のおかずは両隣りの差し入れを受け「当たるも八卦、当たらぬが九分」「八卦見の身知らずも、ひどすぎる」とさんざん。

西のはしは冬なら丹波グリ、春、夏はサヤ豆、つまり枝豆を売り歩いている渡辺和助。四十一歳。「クリや、あまいクリ、焼きグリ。丹波グリえ――」とやっても「まーめ、鉄砲豆。ゆでさや、鉄砲豆や――」とやっても、声がよいのでなかなかの名調子である。商売は繁盛していたが、女クセが悪く、もうけは右から左。家の中は夫婦ゲンカと火の車で、いつもカッカしていた。

この三人、それぞれ違った仕事をしながら、いたって仲がよい。それに、類をもって集まるというのか、そろって話がうまく、おしゃべり好き。朝のあいさつも、ザッとこんなぐあい。

八十八「ヨウ、ご両人。きょうはあきないに出なはれへんのか」

和助「センセ、あかんワ、豆食うたらコレラになるいうて、かいもく買いよらん」

留吉「こっちゃもサッパリや。〝避病院行き〟乗せたいうて、人力車の乗り手があれへん。センセかて、寿命を三十年も保証した人に、チフスでコロッといかれましたやないか」

和助「そこがそれ八卦八段……」

八十八「ウソ九段とでもいうねやろ」

留吉「そらいわん。八卦見にウソは禁物。八卦八段ウソ食えぬ、や」

和助「おまはんは、そんなこといわしといたらうまいワ。けど、こないなことしててはつまらん

な。なんぞやりたいなあ」

明治十九年の大阪は、前年の洪水後の不衛生がたたって、伝染病の集中攻撃を浴びていた。ハシカ、痘瘡、腸チフスが猛威をふるい、五月からはコレラの追い打ち。死者は計一万人を越え、寺が仮避病院になった。〝青菜に塩〟の三軒長屋の三人が、このままへこたれたのでは話にならないがどっこい、それでおわらないのが大阪のおもしろいところである。

一番手は留吉。落語好きがこうじて素人天狗の会に参加したり、町内の涼み台で一席演じたりしているうち、なかへはいる人があって桂文昇の弟子になり、当昇の名をもらった。「ミイラとりがミイラになる」と女房のグチはあい変わらずだったが、八十八先生と和助は、かわるがわるなぐさめた。

「目性の悪い車屋はケガのもとや。落語は笑いころげさしても、ケガさすことない」

やがて当昇は師匠の許しを得ずに天満の席へ前座として出演、破門された。これを機会に京都・幾代席にヘタリ（専属の前座芸人）としてやとわれて行く。人間、なにがさいわいするかわからない。「中年からの修業」をキモに銘じた努力もあって、その後はトントン拍子。のち失明したが、芸の方は開眼、桂派の元祖・文枝の〝四天王〟といわれた文左衛門（大正五年、七十三歳で死亡）にみとめられ、師匠の前名・文三（ぶんざ、三代目）をつぐ。「人形買い」「百年目」などに名人芸を残し〝めくらの文三〟とうたわれ、大正六年、五十九歳で死んだ。

おはなしを戻す。野漠を巣立って行く留吉に、八十八先生も発奮した。「勉強せな」――夜店でいつも隣りに出る古本屋に、心斎橋の加賀屋という大きい和本屋を紹介してもらい、和漠の易学書をむさぼり読んだ。「身知らず、ではすまん」と、自分で方角をうらない、天満天神の裏門へ進出する。関西易学の大家として、巨万の富を築いた宮崎八十八、その人である。





いま一人、丹波グリ屋の渡辺和助はどうしたか？「それがぼくのおじいさんですねン」というのは、東西屋の草わけ・丹波屋九里丸（大正十一年、七十八歳で死亡）の孫であり、漫談家の元祖・花月亭九里丸（昭和三十七年、七十歳で死亡）の子である渡辺東吉さん（三三）（箕面市箕面一の一三九、箕面団地一八号館三九六号）。「三軒長屋」の逐一は、彼が父親から聞いた話だ。「九里丸」は親子二代にわたって、新しいアイデアを開拓した〝一匹オオカミ〟だったが、東吉さんも昭和四十一年八月八日、八年間勤めた関西テレビ・カメラマンの職を捨て、テレビのCMフィルム製作業「渡辺プロダクション」（大阪市都島区東野田町五の三六、島田ビル内）を設立した。祖父ゆずりの〝モダン東西屋〟というところ。血は争えない。

「月給とり生活は性に合いまへんねン。カエルの子はカエルでんな。年次休暇でもちこたえて〝八月八日〟に辞令出してもらいましてン。末広がりで縁起よろしおまっしゃろ」――いよいよ血は争えない。

さて、次のだしものは、トザイ、東西……「和助奮闘談」とまいりましょう。

# 東西屋九里丸

―妙手、奇手くりだす―

明治十九年、ジメジシした「野漠」の三軒長屋にくすぶっていた辻待ち車夫の留はんは、三代目・桂文三への出世街道をたどりはじめた。隣りの辻八卦・八十八先生も後年、関西易学の大家となる猛勉強を開始した。そのまた隣りの丹波グリ兼枝豆売り・渡辺和助が、ユビをくわえて見守っているわけはない。

彼はこの年の秋、コレラが下火になり、クリが出まわる時期をねらって、商売のやり方を変えた。きれいな屋台車に、レンガで小型のかまどをつくり、これも別製の金網で焼いた。「クリや、あまいクリ、焼きグリ。丹波グリエー」の名調子に、いっそうハリを加えたのはもちろんである。焼きグリ屋といえば、ヨボヨボの老人がうすよごれた七輪で焼くものと相場が決まっていただけに、かなり人目をひいたが、その効果はすぐあらわれた。

順慶町の井池筋角に開店したかしわ屋の大将が「あんたのそのええ声で、うちの〝たてまえ〟やってえな」。たてまえ――「トザイ、東西ーい、このたびご近所に開店致しましたかしわ屋は……」式の街頭宣伝だ。当時、大阪では「東西屋」東京では「広目屋」といわれたもので、のちに東京流の「チンドン屋」となる。

「翁」の豪華なふん装をつけたありし日の丹波屋九里丸。

渡辺和助にかえった素顔（いずれも渡辺東吉さん蔵）

クリを売ることだけに熱中していた和助は「ワイの声も、まんざらやないねんな」と目がさめた思い。彼がくふうしてあみ出したのは、ただ店の営業種目を披露するのではなく、端唄や浄るりの替え文句におり込むという方法。これがなかなかの人気を呼んだので、商売がえに踏み切った。屋号は丹波グリから思いついた「丹波屋九里丸」。香水の宣伝チラシをくばる注文を受けると、紺の筒そでに白の半ぱっちという郵便配達夫の服装で、一軒ごとに「郵便」のかわりに「クリ便」とやった。娯楽のとぼしい時代のこと。現代風にいえば「びっくりしたなあ、もう」ともてはやされた。

ところで、この種の宣伝業は、弘化二年（一八四五）に大阪で生まれている。元祖は千日の法善寺入り口にいた香具師

（やし・テキ屋）の元締め・伝安の子分で、飴勝（あめかつ）という男。「さあさ隣りの坊っちゃん、嬢ちゃん。飴屋の勝ちゃん飴勝だ。早う買うたら一番うまい。遅う買うてもやっぱりうまい」と、ひょうきんな売り声で人気を集めていたが、この人も途中から松屋町のある寄席の宣伝係に引き抜かれた。当時、寄席の席主は演し物が変わるごとに、芸人と題目を派手なビラに書き、人目の多いところに張り出したが、弘化二年、大阪町奉行は町の美観をそこなうという理由で、これを禁じた。そこで声の宣伝に切りかえたのだ。

九里丸が東西屋稼業にのり出したころ、すでに飴勝はなく、あとを襲った上町いろは裏長屋の勇亀（いさみがめ）と、新町の豆友（まめとも）が羽ぶりをきかせていた。偶然にも二人とも片目。留は（あばたづら）。豆友は、いまの白木みのるとはいかないまでもかなりの小男だったが、アイデア〃んが弟子入りした桂派の総師・文枝（初代）は高座で「エー、東西屋は勇亀と豆友のほかは、とんとでけまへん。二人でしっかりカタメ合うております」と笑わせた。おまけに勇亀はひどい〃みっちゃ〃（あばたづら）。豆友は、いまの白木みのるとはいかないまでもかなりの小男だったが、アイデアでカバーしていた。とくに勇亀は紺のはん天に八丁笠、シュロのタワシを房がわりにつけた拍子木をひびかせ、芝居口上の「東西ーい」で売り出していた。東西屋の名の起こり。だから勇亀は「ワイが東西屋の元祖やぞ」と、シシっぱなをひくつかせ、飴勝が話題にのぼるといやーな顔をした。

九里丸の人気が出たといっても、ヒイキの数が違う。どうしたら二人の堅塁を破れるか？……飛躍のヒントは明治二十二年にわく。この年、アサヒビールが発売され、東京・銀座の広目屋・秋田周作が宣伝いっさいを引き受けて大阪入りした。この秋田も大阪・天満の出身で、チラシくばりから東京





一の宣伝業者にのしあがっている。秋田は当時西区梅本町にあったホテル「自由亭」の専属音楽隊に出演を依頼、人力車の上で演奏してもらいながら、大阪市内を流す計画を立てた。おいそれと洋楽など聞けない時代だから、奇抜な広告プランであるには違いなかったのだが……。楽士は不安定な人力車の上、おまけに道路が地道そのままのデコボコだから、楽譜もロクに見えない。演奏はメチャメチャ。アサヒビールがカンカンになると、音楽隊も「車の上の演奏なんてどだいムリ」と逆襲、板ばさみの秋田は東京へ逃げ帰った。

「気どって人力車なんぞに乗せるさかい、あかんねや。よしッ、ワイも楽隊入れたろ」――九里丸は古道具屋から維新の調練楽隊が使った太鼓と、歩兵ラッパを買い、練習もしないで門人を引き連れ、さっそく町へくり出した。メロディーもリズムもない乱暴な楽隊だが、人目につくのはこのうえなし。広告主はよろこんで、ヒイキはふえる一方。九里丸のくり出す新手をにがにがしく思っていた勇亀は「拍子木ひとつで人の足を止めるのが、東西屋の身上やぞ。そんだけの腕ないねんやったら、やめてまえ」と片目ですごんだが、九里丸はニヤニヤしていた。日を、月を追うて、九里丸は妙手、奇手をくり出し、そのたびに全国に名を広げた。日清戦争がはじまると、ブリキカンで大砲の模型をつくり、軍服を着た弟子たちにひっぱらせ、自分は馬でその先頭に立った。一つ一厘のクリ型パンを売り、純益二千円を軍に寄付、金杯を下賜されている。スポンサーの名前を書いた番ガサをたくさん用意、雨が降り出すと、貸す手口も彼の考案である。

「世の中がこぜわしゅうなるにつれ、宣伝もにんにゃかにせな――といいまして、仕込み（道具だ

て）には、思いきってカネをかけたそうです。そやから、いつも貧乏で……」と孫の東吉さん。九里丸は孫のつくっているテンポの早い、にぎやかなCMをみたら「ほれみい」と、いうに違いない。

# 五階と九階

## ―〝ミナミ〟と〝キタ〟が客寄せに―

「えらいもん出てきましたで。ちょっとみとくれやす」――五階百貨店（浪速区東関谷町一の一）で衣料店を出している久保田賢二さん（六五）が、いつになくあわてた顔で、同百貨店会長の中尾重治さん（六四）（同所）宅にかけ込んだ。びっくりしている中尾さんをしり目に「ほら、ようみとくれやっしゃ」。久保田さんは赤茶けてボロボロになった新聞紙を、そっと広げた。「ながめハ花乃咲く。草木いろいろ植え並べ、茶店を聯（つら）ね、湯泉を懸（か）け（中略）此絵図面に在（ある）如く眺望閣と名づけたる。其の高を十七間と壱尺の五階の上に登りなバ、浪華の市街ハ眼乃下に。唯此の景色のミならず、新鮮空気を呼吸せバ、身の健康を補へり（後略）」

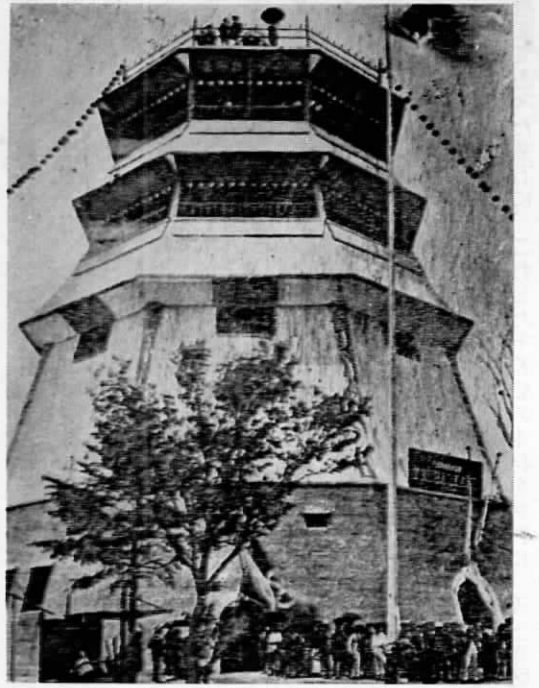
明治二十一年六月とだけなんとかわかるシミだらけの新聞を読みおわると中尾さんは大きなタメ息をついた。それもそのはず五階百貨店の生みの親・眺望閣は明治三十六年七月、大阪で開かれた第五回内国勧業博覧会の記念につくられたと思い込んでいたから。久保田さんは自宅のフスマをはりかえ

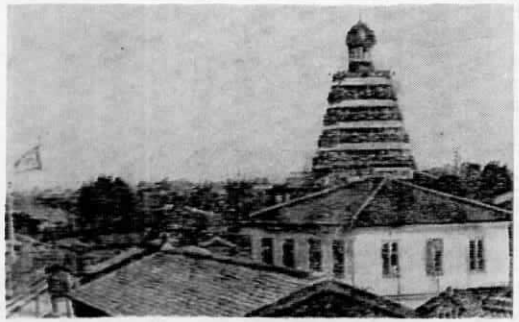




中、下張りのなかから偶然みつけたのだ。昭和四十年の十月のことだ。「あのときはびっくりしましたなあ。せやけんど、あの新聞が五階関係者にみつけられたんは、何か因縁めきまんな」――中尾さんはメガネ越しに柔和な目を輝かす。

「あんな高いところにのぼって、倒れたらどうしょう」「てっぺんに立ったら、どの辺までみえるやろか」。押し寄せる群衆がガヤガヤ。明治二十一年七月十四日、大阪ではじめての五階建ての建て





（上）〝ミナミの五階〟眺望閣と
（下）〝キタの九階〟凌雲閣。

物「眺望閣」が初公開された。浪速区日本橋三丁目、いまの専売公社大阪地方局があるあたり。レンガと白ぬりのカベ、さらに屋根ガワラを使った六角形の建て物は、当時の風俗同様、国籍不明型だったが、見物人はそんなことにはおかまいなし。三十一㍍という、とてつもない高さにひかれた。

宣伝文句もふるっていた。「津の国、河内、和泉平や、淡路島からはりまがた。此の五ケ国の風景を一眸（め）のうちにおさめけり」。いまのビルラッシュとスモッグでは想像もできないが……。五百平方㍍あまりの敷き地には茶店、料亭が並んでいまのヘルスセンターなみのにぎわい。まもなくオーストラリア人、エ・ナフタリーが、美術展覧会と称して、人体の内臓のロウ細工をみせ、人気を一層あおった。人の波をあて込んで、建て物のまわりに露天の衣料、雑貨、道具店が建ちはじめた。五階百貨店の前身だ。客に大声をかけ、荒っぽい商売をしたが、薄利多売の実利主義が気に入られ、たちまち名物になった。

眺望閣の大人気で、大阪はちょっとした高層建築ブームがまき起こる。約二カ月後の九月十九日、捨てであった墓石に、こわした千石船の木材を材料に、天王寺区生国魂神社近くに展望台「生玉富士」がお目見えした。浅草の展望台「富士」をまねたものだが、八月の台風で浅草の〝本家〟が倒れると、建築中の生玉富士も仲良く倒れるほどの突貫工事だった。とにかく楽しみといえば、芝居見物か花見しかなかったので〝高処（たかみ）の見物〟は大当たり。翌年三月二十七日には、浪速っ子のドキモを抜く建て物が東海道線の北側、いまの市立梅田東小学校のある北区茶屋町五三あたりに出現する。





「十三間（二十三・四㍍）四面の二層楼の上に、八角形の六層楼を築き、更に其上に時計台を設け、都合九階を成せるものにして総高百三十尺（三十九㍍）あり（中略）又同閣の付属地は三千九百坪（一万三千平方㍍）ありて其内には凡そ二百坪（六百六十平方㍍）の池を掘り……」当時の新聞が、こう書いたキタの凌望閣。眺望閣に対抗してつくられただけに名前まですごい。敷き地内に四季の花を植え、温泉場や舞踏台、自転車競走場までつくって大宣伝。眺望閣よりひとまわりスケールが大きかった。

もっとも、落成式の前後に、とんだ〝物いい〟がついた。「工事が完成するまで見物人の登観相成らず」とその筋からのきついお達し。「あんな高い建て物、もし倒れてきたらえらいこっちゃ」と付近の住民が不安のあまり訴えにおよんだらしい。地元の警察も大いに〝同感〟したとみえ追っかけて「落成後といえども警察官が実験してだいじょうぶと認定してからでなければ開場すべからず」。おまけに開場してからも夜間点灯はご法度。これは眺望閣のときも同じだったが、いくら〝魔天楼〟でも照明がなくてはウドの大木も同じこと。案のじょう、落成式がすんでも〝実験〟に登った警察官は足がふるえたのか、なかなかOKといわず「これでは宝の持ちぐされや」と施主はボヤきつづけたとか。

当時の梅田かいわいは、すてん所があるとはいえ、少しはずれると兎我野――ウサギがとびはねるような野原が広がっていた。いまの扇町公園には十五年に大阪監獄堀川分署が建ち、夕暮れになると人影はほとんどなかった。こんなところに凌雲閣ができたのだ。

こうなると先輩格の眺望閣も負けておれない。七月にはいるとさっそく花火大会で客をひきつける。汽車の進行、花滝、花ガサ、車火など趣向をこらした花火を上げて劣勢をばん回した。早くもキターミナミのお客争奪戦がはじまったわけだ。そのうち浪速っ子は眺望閣を〝ミナミの五階〟凌雲閣を〝キタの九階〟と呼ぶようになった。元来、ミナミは島之内、キタは曾根崎新地だけをさしていたが、ミナミの中心が難波、キタの中心が梅田になるのはこのころからだ。

〝五階〟の露店は一昨年九月〝三階建て〟の五階百貨店に〝出世〟。いま衣料、運動具、大工道具店など三十八軒が店を出しているが、相変わらず値ぎられている。庶民的な親しみやすさが、うしなわれていないからだろう。久保田さんのみつけた新聞は、きれいに紙で裏打ちして事務所の額におさまっている。